# 事例 地域に広がる「認知症カフェ」5つのケース

## 3種類のカフェを実施

総合施設長 岡　大輔
社会福祉法人三愛会 グループホームサンフラワー（北海道士別市）

当法人は士別市からの認知症総合事業委託として認知症地域支援推進員の活動の一環として『相談型』、『地域ネットワーク型』、『予防型』の3種類のカフェを実施している。

相談型は、認知症高齢者、認知症の方と一緒に暮らすご家族の話を聞きながら、コーヒー等を飲み、認知症介護に関する相談や今後の介護の方向性の検討や、家族同士の情報交換、交流を内容としている。平均利用人数10人、毎週土曜日13時30分～15時30分。参加者の声「さまざまな相談ができてよかった」。

地域ネットワーク型は、地域の専門職や地域住民が認知症を中心に交流を図り、事業所、職種間のネットワークづくり、介護情報の提供を目的とする。平均利用人数14人、毎月第3週金曜日18時～19時30分。参加者の声「事業所の取組みや対象者の話が聞けてよい」。

予防型カフェは、平成28年10月から元気な高齢者が在宅生活を継続する施設として士別市が「いきいき健康センター」をオープンしたのに伴い、当法人が開催。交流を30分、認知症・介護予防体操を30分行い、休憩・交流を30分、その後体操を20分実施し登録カード等の返還をするプログラムになっている。平均利用者20人、毎月第2・4週土曜日9時30分～11時30分。参加者の声「体の調子もよく楽しい」。

3種類のカフェについては、参加する利用者の全体像に合わせてプログラムや話の進め方をリーダーがその場で変更、工夫している。今後は、登録者の増加により、プログラム実施が困難になることも考えられ、検討している。また予算については減少傾向にあるため、認知症サポーター等のボランティアの導入を考えている。コーヒー等の飲み物は1杯100円の実費をいただいている。

なごやかな雰囲気の相談型カフェ

## 「がっこ茶っこ」で地域と交流

管理者 日野原剛
株式会社えがお デイサービスセンターひびき愛（秋田県大仙市）

株式会社えがおで運営している認知症対応型通所介護「デイサービスセンターひびき愛」は、大仙市大曲上大町に平成19年開設した。この地域は、大仙市の中心市街地に位置し、高齢化と空洞化の進んでいる町内である。

平成25年2月から地域との交流会「がっこ茶っこの会」を開催してきた。平成29年の3月まで13回開催したが、お楽しみ会が中心であった。町内の方による「ハーモニカ演奏」、「歌と踊り」、「腹話術」等や、職員による「認知症予防の体操とクイズ」、「楽しくできる脳トレ」、「オレオレ詐欺の寸劇」等の内容であった。

平成29年4月の新築移転に伴い、地域交流スペース「がっこ茶っこ」を設けた。

4月からは、月1回のペースで開催していく計画で、認知症の方やご家族が相談、交流できる内容を目指している。お楽しみ会や講座等も計画している。

また、町内会の役員会に会場を提供し、6月1日には研修室での町内会総会も予定されている。

腹話術（左）と演奏で盛り上がる

## 多世代交流を図る袖団カフェ

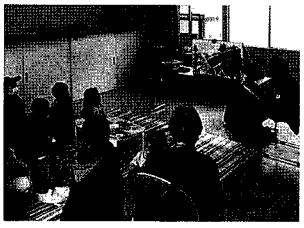
有限会社ウェルフェア グループホーム谷津苑（千葉県習志野市）

グループホーム谷津苑は、平成26年12月から月に1度、近くにある袖ヶ浦団地の集会場を利用して「袖団カフェ」を開催している。同カフェには、毎回団地の高齢者はもちろん認知症の本人、その家族など約40人が参加。

また、平成28年12月からは、「袖団おやこカフェ」も行っている。これは、同グループホームに併設している認可外保育施設「保育ルームロゼッタ」の“保護者の育児相談の場”として展開。“高齢者と子どもたちの交流”を目的に袖団カフェと同時開催することにした。両カフェは隣接した部屋で行っており、自由に行き来ができる。毎回約10組の親子が参加している。

子どもたちと交流できることから、紙芝居や手品を準備してくる高齢者も。おやこカフェに参加している保護者にとっても、相談をしている間に子どもの面倒を袖団カフェでみてもらえるという利点がある。

2つのカフェの同時開催は認知症の人とその家族、そして子どもと保護者、地域高齢者と、多世代の交流の場になっている。（編集部取材）


読み聞かせに夢中の子どもたち

## 医療カフェに託すもの

施設長 村田佳乃

医療法人北吉田診療所 グループホームしょうせきあいあい（愛媛県松山市）

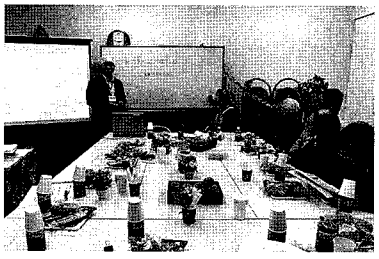
グループホームしょうせきあいあいは、「医療カフェ」と銘打った交流座談会を開催している。毎回テーマを決めて専門職による情報提供のあと、それに対する感想や質問があり、自然に和気あいあいとした交流会へと進んでいく。

形式ばったものは何もない。しかし「みんくるカフェ方式」に従って、あくまで、参加した人が感じたり気づいたりする発見を大切にしている。

運営推進会議に協力してくださる地域の人やご家族が、毎回10人くらい参加して、今までに3回開催した。

初回は「賢い患者になろう」と題して、救急大病院と小さな開業医を比較して、外来医療の役割分担の方向性を医師が説明。それに基づいて「かかりつけ医に求められること」をお互い話し合い、地域包括ケアシステムの流れを勉強した。

私たちは医療の専門家として、地域の素朴な疑問を取り上げて、一つひとつ解答を導き出す手助けをしていきたい。医療と福祉は決して切り離すことのできない自然な流れという大前提に立ち返り、グループホームがやすらかな看取りの場となるよう正しい情報提供に努めたい。そして、尊い命が医療放棄されないように、医療カフェの存続をがんばりたい。


薬について学ぶ

## 高校生・大学生と催すオレンジカフェ

介護部部長 杉本　健

医療法人社団栄寿会 グループホーム栄寿荘（佐賀県杵島郡江北町）

グループホーム栄寿荘は平成12年12月、佐賀県江北町に開設した。江北町は佐賀県の真ん中に位置し、カエルがたくさんいる、住みやすい町である。平成28年に新町長が誕生し、これまでのビッキー祭りからパワーアップした祭りをと、協力団体を募集。カフェは江北町ビッキー祭りのイベントの一環として行った。

主催はグループホーム栄寿荘。参加者はホーム入居者、スタッフ、母体の古賀小児科内科病院スタッフ、入居者の家族、祭りの来場者の皆さんの約100人。

カフェの特徴は佐賀農業高校の高校生が行うケーキカフェ「サノボヌール」、西九州大学短期大学部が行うワンプレートランチ「ノンブリル」のコラボレーションにより、ワンコインランチを提供。また、西九州大学短期大学部の協力によりハンドアロママッサージのサービスも行った。

コラボした2つの学校は2～3カ月に1度、上小田の古民家を改修した寄合所で活動しており、グループホーム栄寿荘からも参加していた。この活動は「過疎化が進み、てこ入れが必要」と、結成された上小田まちづくり座談会の中で考え出されたもの。そのメンバーに栄寿荘のスタッフも参加し、今回のカフェに繋がった。

用意した食事は完売し、祭りとの相乗効果もあり、大盛況であった。江北町町長、行政職員、地域の方々からも感謝の言葉をいただいた。

「上小田の地域の課題はグループホーム栄寿荘の課題でもある。少しでも力になれば」との思いが結実したイベントであった。初めての行事で反省する点も多いが、皆で話し合いよりスマートなカフェに育てたい。

用意した食事は売り切れに